

私の戦争体験

平成二年二月十五日発行、「私の戦争体験」風化しない為に「第二集」より再掲

あの日！あの時！あの惨劇！

下新田町 男性

教育の専門家である私！あの時程教育の偉大さと恐ろしさを痛感したことは無い。一億人の誰一人もが勝利を確信する様に教育されていたから・・・前橋が大空襲により焦土と化した翌日、県の指令によりグライダーの技術を習得し、帰県して少年達に飛行機の初歩訓練をする任務を帯びていた私であった。

新前橋駅近くのライジングサン石油会社は、空襲の為猛火を吹き上げて燃えていた。これ等を後にしてようやく目的地、長野県小海線の野辺山滑空場へ行く。ここは八ヶ岳近くの広大な高原で、片方では少年航空兵らしい多くの者が猛特訓中だった。我々の一隊は全員で十数名である。訓練は、厳しかった。高原といっても暑さも厳しかった。食糧は貧しい配給米を家族の分をけずって白米を持参した。ところが野辺山では赤紫色のこうりゃんと大豆がほとんど。白米などほんの少々混じっている位だ。

しかし、グライダーは最も大切な武器である。朝から訓練の終わる夕方まで磨きあげ、なでさすって大事にしていた。八月二十日午前の訓練で、三メートルの高さを二、三十メートルの距離を滑空出来た。全員満面笑を浮かべて機は草原に休ませた。

正午、全員食堂に集合指令。そして思いもよらぬ玉音放送。すべての人がきよとんととして意味がわからない。時間がたつにつれて真相がわかる。虚脱状態。グライダーなど草原におきざり、格納しようとする人は一人もいない。我々群馬県人は県境の山を越え歩いて帰ろうとさえ相談した。しかし、汽車が出るという通知に、ようよう汽車に乗り高崎下車。それから、よろよろとして家に着き、裏口の石に腰を下ろしてがぶりついた生胡瓜の味は、一生忘れることはあるまい。つらい人生の中の悪夢のような思い出の一端である。



父を通して平和を考える

光が丘町 女性

私にとって父という言葉のひびきは、なんとせつなく、なつかしく、胸のしめつけられることばであるうか。

父に関して私の知る限りの事は、わずかな思いでと十九年三月十日、南シナ海にて戦死、たつたこれだけである。

又、母とも四人の子育てに疲れたのか、父の事をじっくり話し合う機会もまま死別している。昨日の事さえ危なっかしい近頃の私の頭の中から、父の思い出だけは特別な引き出しにしまつてあるかのように、鮮明に思い出せる。

戦地より父が帰った日の唯一の楽しみは、大きな背中一人ずつおぶってもらい、大して大きくもない家の中を、端から端までゆつくりゆつくり歩いてくれる。その背中の暖かく広がった事。又、夜中の帰宅の時、いち早く気付いた私は自分の枕を持って父の枕元へ。父もそれに気付き、腕で作って待っていてくれる布団のトンネルの中へもぐり込む。父の身体の暖かい感触と、きまつてチクチクする類のひげ。恥ずかしさに身をちぢめながらだったが、そのチクチクした感触だけが悲しいほどに懐かしく残つて、私の胸を熱くさせる。

十九年、戦死との公報が家族にあつただけで、最後に乗つていた船の名も、遺品も何もないまま今日に至っている。

妻と四人の子供を残して、南の海で死んでいった父の気持ち、父に近い年齢になり漸く気付く。母は、もちろん、兄弟姉妹、それぞれ「父がいてくれたら・・・」との思いを胸に秘

め、誰一人としてくちには出さず過ごしてきた。それは私たちと同様の幾千幾万の家族、又それ以上の辛い悲しい多くの戦争の傷跡が残っているのを知っているからである。

しかし、たつた一人の父を失つた事実は、その子にとつては大きな悲しみであり、人生をも変えたかも知れないのだ。

地球より「戦争」という言葉が消えるのは、いつの事だろうか。本当に、心から全世界の人々が平和に暮らせる日が来ることを願う。



逃げ惑つた夜

大利根町 女性

その日は何となく落ち着かない一日でした。米軍機がまいて行つたビラによると、前橋が空襲される予定になつていたので、街の中心に住んでいた私は、夕飯後、母と二人で下小出の知人宅へ初めて遠方待避に行つたのです。

防空壕に入り、ホツとしたのも束の間、空襲警報が発令されると同時に、腹の底にズーンと響くような鈍い音をたててB29の襲来です。やはりあのビラは本当だつたと思つてみると、突然壕の中がパツと明るくなり、火花が飛び散りました。竹藪は根が張っているから安全だと云う常識は破られ焼夷弾が直撃し、壕の中迄落ちて来たのです。慌てて逃げ出し、垣根を乗り越え、裸足になつてしまひました。くじ引きでやつと当つた貴重な運動靴でしたが、サイズが合わずブカブカだつたのです。田の畦道を夢中で逃げながら、ふと空を見上げると火花が上が

り四方八方に火花が散つているのです。思わず「きれい」と心の中で叫び、恐ろしさも忘れて立ちつくしてしまいました。泣き声でハッと我に返ると、小さな弟と妹の手を引いた少女が「今そこで、母ちゃんが死んじゃつた」と泣きじゃくつていたのでした。そう、火花などではなく、落下途中で火花の様に拡散する親子焼夷弾だつたのです。火災を起こし、街を焼き尽くすだけでなく、直撃されれば即死です。幼い子を三人も残して逝つてしまつたその母親は、悲しい犠牲者でした。

何処をそう逃げたのか「危ないから早くこの中へ入れ！」の声に思わず川に入ると、何人かの男女が畳を頭に揚げ胸まで浸かっています。直撃されればひとたまりもない畳一枚に命を預け、皆祈る思いでした。ふと目の前に下駄が流れて来たので、拾い上げると又片方、誰か上流で私と同じように脱げてしまったのでしよう。温泉場で売つている焼印の捺された固い下駄ですが、私の足を守つてくれた有難い一足でした。

やがて敵機が去り、ガソリン臭い雨が降り、街は火の海、熱くてとても近寄れませんでした。自分の家は絶対残っていると願ひながら、荒牧の知人宅へ行き、辛く恐ろしい一夜を過ごしました。

後日、前橋へ帰る途中も機銃掃射を受け、桑畑へ隠れながらやつと辿り着いた街は、願ひも

空しく一面焼野原。思い出の一杯詰まつた家の焼跡に立ち、泣き続けました。

お寺の庭で、犠牲者の遺体が茶毘に付されていましたが、その強烈な臭いを今も忘れることが出来ません。

毎夏、火花を見るたびに、あの夜の光景と重なり、華やかな美しさの陰の悲しい出来事を思い出してしまいますが、火花は美しいだけの思い出で残る・・・そんな平和がいつまでも続いて行くことを、心から願わずにはられないのです。

前橋大空襲とその後

前箱田町 男性

第二次大戦中、本県へのB29の最初の襲来は昭和一九年一月七日であったが、被害はなかった。同二年二月一日日太田町(太田市)中島飛行場が襲撃されて以来、本県への空襲はにわか激しくなりました。七月に入ると毎日のように空襲され、小学三年生の夏休みは楽しいこともなく毎日空襲警報のサイレンが止むことはなかった。

今でも忘れることのできない八月五日の夜の前橋空襲は、空が真っ赤に染まり、横野村(現渋川市赤城町)からでもよく見えました。

前橋の親戚の人々の無事を祈つたことを思い出します。その後、渋川の工場や上越線の鉄橋の空襲を受け、終戦前日の高崎や伊勢崎の空襲も多くの被害を受けた。また記憶にあるのは、米軍機から錫かアルミか判らない金属テープが落下され、学校へ持参したことがありました。今考えると、基地からの電波妨害の作戦かと思ひます。

終戦の日はラジオから天皇陛下の終戦の言葉を聞き、戦争は終わったが、これからどうなるか不安で、その夜は眠れなかった。

その後、学校では教科書を墨で黒く塗りつぶす作業もした。三年生後半く四年生の頃は満足な教科書もなく、スポンジの球で野球をすることが多かった。五年生の頃から小学生らしい学習となった。

戦争のない平和な日々を長く続くよう、みんなで考えましよう。

